



特集 その後どのように暮らしていますか？

## まちに開く豊かな居場所

特集 その後どのように暮らしていますか？

# じっくり育む、まちと暮らし

ソーラータウン西所沢(埼玉県所沢市) | 木造一戸建て(建築家と建てる家) | 布施邸(ご夫婦)



建築家 田中敏博さんが手掛けるまちづくり

1

## ストーリー

緑あふれる長閑な街並みの中で、時折聞こえてくる子どもたちの楽しそうな遊び声。ここは全22棟の家が建ち並ぶ、相羽建設の分譲地「ソーラータウン西所沢」。この街に住みはじめて3年目になる相羽建設のスタッフでもある布施夫妻に、家づくりのきっかけと現在の暮らしぶりについて伺いました。

「みんなで"共生する"という住居のあり方に興味を持っていた」という順さん<sup>ともこ</sup>と朝子さん。しかし理想の環境はなかなか見つからずあきらめかけていた時、偶然チラシで見つけたつむじモデルハウスに出かけました。「対応してくれたスタッフの照美さんに共生のことを話したら、『向こう三軒両隣』をテーマにしたソーラータウン西所沢を紹介してもらったんです。お話を伺ったタウンの住まい手さんが家の中を案内してくれたり、BBQに招待してくれたり……その懐の深さやお互い様で暮らしている心の豊かさに惹かれて、すぐにここに暮らすことを決めました」と朝子さん。



## 2 人が集う 暮らしのへそ



- 1
- 2
- 3
- 4

1.床はカラマツ、壁は薩摩中霧島壁の2階リビング。2.おしゃれな手料理。3.コーヒーを入れる時間は至福のひととき。4.夫婦で料理を楽しむようにキッチンが広めに設計。



2階リビング

▲ 木のダイニングテーブルとの色合いが映えるリビング。照明はOtani Yoshiko Glass。

2階リビングの中心にある一枚板のテーブルは、脚をたおせば座卓にもなり大人数で食卓を囲むこともできる二人のお気に入り家具。「リビングは夫婦だけではなく、5〜6人がいるイメージで空間づくりを考えました。お互いに人を招いて食事をしながら会話を楽しむ時間がとても好きなので

と順さん。小上がりの畳スペースも大勢が来た時にはベンチがわりになり、椅子に座っている人と視線の高さを変えずにお喋りできるのが嬉しいところ。このテーブルを中心に広がる豊かな暮らしの時間。また、現在つむじモデルハウススタッフとしても活躍し、本誌の「つむじ通信(P.17)」では、

自邸のDIYやお手入れのコラムを連載中の朝子さん。「自分の家だからこそ細工したり和紙を貼ったりできるし、手をかければちゃんとこたえてくれる自然素材というのが、今までの賃貸生活からの大きな変化です。今の仕事にも活かされて、誰かの役に立てるのが嬉しいです」とニコリ。

### 3 住まいのみどころ



柿渋染の和紙を市松模様に貼った壁

和紙左官を施したガラス戸



1.アトリエスペース。2.朝子さんのお父様が作られた木彫案内看板。3.ギャラリーのようなゆったりとした玄関土間。4.和紙を使った空間づくりを手がける朝子さん。



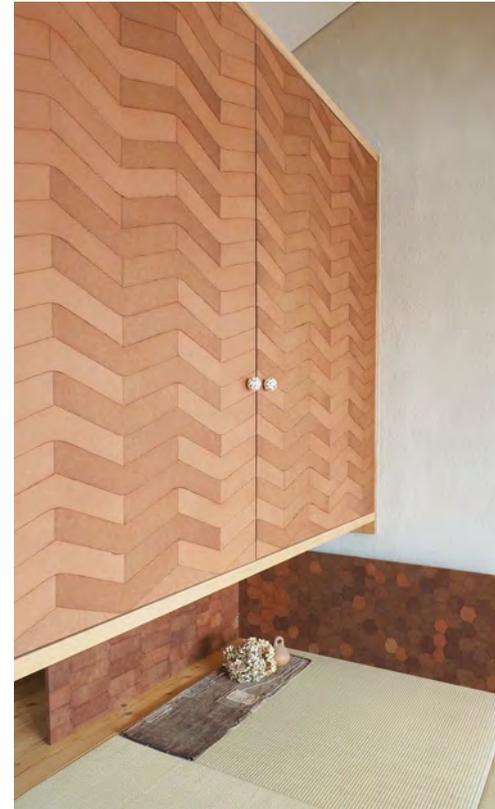
### ▲ 住みびらく アトリエ

和紙作家(Lasen)としても活動している朝子さん。街に面した一室をアトリエとして使っています。「道ゆくご近所さんたちにも楽しんでもらえるように、いずれはアトリエでの制作風景がこのタウンの日常になったら良いなと思っています」とお話しくださいました。

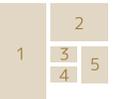
### 暮らしを彩る 作家さんの作品



自身が施工した和紙での空間づくりはもちろん、家の中にはたくさんの作家さんたちによる作品があり、それぞれが暮らしのアクセントになっていました。素材や色の組み合わせによって見た目の印象も素敵に変わり、手をかける楽しみも伝わってきます。



1.朝子さんによる柿渋和紙張りの開き戸と風炉先屏風。2,3.a-wood富沢麻子さんの照明と木彫つまみ。4.森本秀樹さんの街並みを描いた水彩。5.hyacka岡林厚志さんの珈琲カウンターとペンダントライト。



### 取材後記

右の写真は「建て方」の日に2階に上がって大工さんたちと撮ったもの。「私たちの大切な思い出の一枚です」と笑顔で振り返るご夫妻。いろんな人たちが関わってできあがる家というのは、その思い出も含めてご家族にとっての一生の宝物だなあと感じます。素敵な暮らしぶりに心があたたまった一日でした。(記:吉川)

設計・施工:田中敏博建築設計事務所・相羽建設  
撮影取材・編集:伊藤・吉川・猪股  
ainohaバックナンバー <http://aibaeco.co.jp/100story/life/>





特集 その後どのように使われていますか？

## 小さな茶室「つぶ庵」



「つぶ庵」外観

特集 その後どのように使われていますか？

## 小さな茶室「つぶ庵」

東京都町田市 | 茶室「つぶ庵」(建築家とつくる居場所) | T邸



### 1

#### ストーリー

今回ご紹介するのは、ご自宅の敷地内に建てられた小さな茶室「つぶ庵」。亭主であるT様にこの場所をつくったキッカケや使い心地についてお話を伺いました。

日本の伝統文化に関するものが好きで、20代の頃から茶道や華道を習っていたというT様。忙しさの中で一旦は休止していたものの、自由な発想でお茶をされる先生との出会いから「自分のやりたいお茶」について考えるようになり、稽古を再開されたといいます。「お茶に限らず、私は華道やお料理も一緒にやっていきたいんですよ。大きな目標は茶事<sup>※</sup>を習慣的にすること。床の間にお花を活けたり懐石料理をお出ししたり……自宅内のスペースでは難しくても、離れにお茶室を設ければ、それらが全部実現できる、と思ったんです」とT様。茶室の計画はそんな思いからスタートしました。

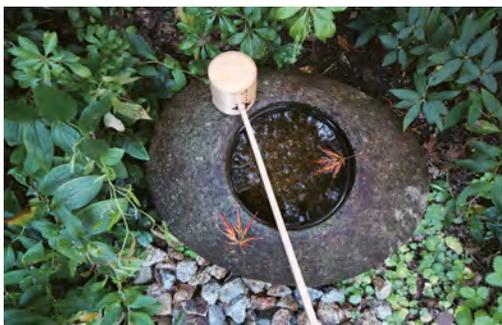
※茶事…茶の湯において懐石、濃茶、薄茶をもてなす正式な茶会のこと

## 2

### とくべつな時間

茶室をつくるにあたり、お仕事でつながりのあった家具デザイナーの小泉誠さんに相談したところ、ちょうど「舎庫」という車一台分ほどのスペースに建てられる小さな建築のデザインを手掛けているところでした。自宅の敷地内にもう一つの豊かな居場所を設けるというコンセプトとも重なる部分があったことから、舎庫をベースとしたデザインに。サハラ砂漠の砂の色をイメージした床の間、杉材をふんだんに用いた壁や天井、やわらかな光をとりいれるスタンドグラス、そして造園家の小林賢二さんによる石と植栽を組み合わせた趣のある庭づくり——。様々な魅力が詰まった小さな居場所が生まれました。

完成から8ヶ月ほど経った取材当日、T様は凛とした着物姿で迎えてくださいました。朝、庭で摘んで生けた瑞々しいピナンカズラと寒菊を床の間に眺めながら、お抹茶とお菓子をいただいたり、とてもゆっくりとしたひと時を過ごしました。日常とは違う、とくべつな時間の流れを感じます。



茶室の前にある石の水鉢



スタンドグラスの光がもれる(右側)茶室内



点てて頂いた抹茶



床の間に生けられたピナンカズラと寒菊



開口から見える庭の景色



スタンドグラスの採光部

### 3 つぶ庵の魅力



#### ▶ 素敵なひとになれる場所へ

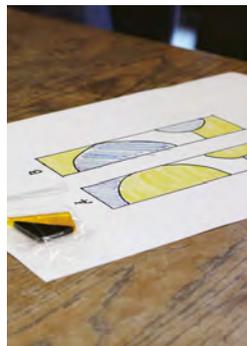
「お茶だけではなく、出汁やお料理、お茶の歴史を学んだり、ともに考えながら知識をひろげてゆく。ここをそんな場にしたい」と、ちょうど数日前からつぶ庵でお茶の研究会をはじめられたそうです。お茶に加えお花の指導をすることもあるというT様は、ご自身もそれらを通してモノとの向き合い方や精進し続ける大事さを学んだといいます。「来てくれた方が自分なりの価値を見つけて、素敵なひとになっていくことのお手伝い如果能したら」と笑顔で話してくださいました。



### ひとつひとつ 手仕事で



- 1…加工場で製作中のつぶ庵。
- 2…ステンドガラスのデザイン案。
- 3…製作担当の益子大工さん。
- 4…栈木を使った躰口の戸のデザインを検討するT様と小泉さん。



一見シンプルな外観のつぶ庵ですが、建物のちょっとした角度や左官壁の絶妙な色味など、小泉さんや大工さん、職人さんたちの技術と工夫の結晶といえる空間に。T様ご自身も躰口の戸やステンドガラスのデザインを検討したりと、みんなのアイデアや手仕事盛り込まれた建物です。

#### 取材後記

「つぶ庵」の持つ独特の空気感。それは建物や庭のデザインはもちろん、T様の美しい所作や、丁寧なおもてなしから生まれるものでした。仕事やプライベートなど日々追われることが多い現代の私たちの生活ですが、人やモノと向き合ってじっくりと考える…そんな時間を大切にしたいと思ったひと時でした。(記: 広報 吉川)



設計: Koizumi Studio <http://www.koizumi-studio.jp/?studio>

造園: 小林賢二アトリエ <https://kobayashi-atelier.com/>

施工: 相羽建設 / 撮影取材・編集: 伊藤・吉川 ainoha/バックナンバー <http://aibaeco.co.jp/100story/life/>



特集 その後どのように暮らしていますか？

## 陶芸工房のある住まい



特集 その後どのように暮らしていますか？

# 陶芸工房のある住まい

東京都 | 木造一戸建て(+工房) | A邸(ご夫婦)



## 1

### ストーリー

今回ご紹介するのは二人暮らしのA様ご夫婦の住まい。陶芸作家のお二人は、以前は一つの家からそれぞれ別の工房へ通っていたそうです。「家と工房を行き来する手間や、作業量が増えて工房が手狭になってきたこともあって、「住まい」と「仕事場」が一緒になった家がほしいと思うようになったんです」とご主人。そこで、今まで住んでいた愛知県を離れ、ご主人のご両親の住む東京で土地を購入されました。設計を担当したのは、<sup>※</sup>OZONEでの紹介から出会ったオノ・デザイン建築設計事務所の小野喜規さん。念願の住居兼工房の家づくりがはじまりました。



## 2

### ギャラリーのような空間

1階が工房、2階が住居となっているA様の住まい。玄関からリビングまで、家全体がまるでギャラリーのような素敵な雰囲気です。私たちが普段つくっている作品や新居に飾りたいと思っていた彫刻から、小野さんが住まいのイメージを膨らませて下さったんです」と奥様。奇抜な感じだけではなく、なんとなく愛着のわくシンプルな住まいのかたち。キッチンスペースには大工さんと建具屋さんお手製のガラス戸の大きな食器棚あり、こちらはお二人の作品やお気に入りのうつわを収納しつつ眺められるようにとつくられたもの。天窓からさしこむ光がやさしく空間を照らしていました。

「2階はリビング・書斎・ダイニングが完全に仕切られていないこともあって、ちょうどこの3ヶ所がゆるくつながっている感じがすごく居心地がいいんですよ」。そう言ってにっこりと微笑むA様ご夫婦。穏やかな空気感のなか、思わず時間が経つのを忘れてしまいそうになります。



▲ ダイニング・書斎・リビングがゆるやかにつながる2階スペース

